

From the Pulpit of the Japanese Baptist Church of North Texas  
May 22, 2011

父の心

ルカ 15:25～32

15:25 ところで、兄息子は畑にいたが、帰って来て家に近づくと、音楽や踊りの音が聞こえて来た。それで、

15:26 しもべのひとりを呼んで、これはいったい何事かと尋ねると、

15:27 しもべは言った。『弟さんがお帰りになったのです。無事な姿をお迎えしたというので、おとうさんが、肥えた子牛をほふらせなされたのです。』

15:28 すると、兄はおこって、家にはいろいろともしななかった。それで、父が出て来て、いろいろなだめてみた。

15:29 しかし兄は父にこう言った。『ご覧なさい。長年の間、私はおとうさんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しめと言って、子山羊一匹下されたことがありません。』

15:30 それなのに、遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして帰って来たこのあなたの息子のためには、肥えた子牛をほふらせなされたのですか。』

15:31 父は彼に言った。『おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ。』

15:32 だがおまえの弟は、死んでいたのが生き返って来たのだ。いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか。』』

放蕩息子のお話は、弟息子が帰ってきてめでたし、めでたしでは終わっていません。最後に放蕩息子の兄が登場し、父親が弟息子を迎えたというので、怒って、すねて、家に入ろうとし

ない兄をなだめるところで終わっています。放蕩息子のお話は、やはり、放蕩息子の兄のことに触れなければ、結論にまで行かないようです。もういちど放蕩息子のお話をとりあげ、放蕩息子の兄のことに触れたいと思いました。

## 一、放蕩息子の姿

ルカ 15 章には羊と、銀貨と放蕩息子が登場します。そしてこの三つはそれぞれ、罪の中にある人間の姿を描いています。

羊の場合は、自分から進んで羊飼いかから離れたわけではないでしょう。どこかで道草を食っていたり、何かに恐れて急に走り出したりして群れから離れたのでしょう。銀貨には意志がありませんから、みずから進んで持ち主の手から逃れたわけではありません。ですから、羊のたとえや銀貨のたとえの場合は、罪の状態がいかに惨めなものであるかを教えてはいますが、人間の罪に対する責任については、次の放蕩息子のたとえになってはじめて明らかになります。

放蕩息子は、親に家を追い出されたのではなく、自分のほうから父親に財産の生前分与を願い出て、親を捨てて遠い国に行ってしまったのです。そして、息子はその国で父親の財産を浪費してしまいます。そして、彼は、最後には、その国で飢饉に見舞われ、豚飼いになるのですが、こうしたことは、人間の罪を良く描いています。人は神に造られ、生かされている存在であるのに、あたかも自分が自分で生きているかのように思い上がり、神などいない、神がいたとしても、自分には神はいらないと、神を否定して生きています。また、神は私たちにありとあらゆる良いものを与えてくださっているのに、私たちは目に見える資産だけでなく、健康や能力、機会や良い人間関係という資産も、無駄にしたり、駄目にしています。放蕩息子が財産を使い果たした時、その国に飢饉がやってきたように、神から離れた人生は、最初は幸福そうに見えても、最後は苦い結果

に終わるのです。放蕩息子が空腹のあまりブタの餌さえ食べたいと思うようになったように、神から離れたたましいは、決して満たされることがありません。放蕩息子がブタ飼いとなって奴隷のように働かされたように、罪は人から、ほんとうの自由を奪ってしまうのです。放蕩息子が父の家に帰らなかったら、そこで飢えて死んでいたことでしょう。そのように、神から離れたところに待っているのは死と滅びなのです。

聖書は、神から離れた人々を「罪人」と呼んでいます、  
「罪人」と言っても、すべての人が犯罪者になるとか、不道徳な生活に溺れているというわけではありません。善良で、きちんとした生活をし、すすんで人助けをし、他の人の模範になるような立派な生活をしている人も多くいます。しかし、神から離れた人は、そのたましいの中心にぽっかりと穴があいているのです。ドーナツの穴のようなものです。ドーナツのように、職場や友だち関係で見せる部分には「身」があるのですが、家庭や、個人の内面という中心にむかっていくと、そこは空っぽなのです。真中に「芯」がないのです。アウグスティヌスが、「私たちは、神のかたち造られた。だから、神のもとに立ち返るまでは本当のやすらぎはない」と言ったように、この空白は、神によってしか満たされないのです。聖書は「すべての人は罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができない」（ローマ3:23）と言っています。聖書が「すべての人」というのですから、誰も例外はありません。自分と他の人とを比べて、「自分はあの人より少しはましだ」と思ったからと言って、それで自分に罪がなくなるわけではありません。自分と神との距離を測ってみましょう。そうすれば、誰もが、自分が神から遠く離れていることが分かるでしょう。それが分かるなら、それが、神に立ち返る第一歩となるのです。このたとえにある「失われたもの」とは自分のことだと気づかせられる人は幸いです。

## 二、父親の喜び

次に、このたとえ話には、失われた者を捜し求めてくださる神の姿が、三人の登場人物によって描かれています。第一は羊飼、第二は女の人、そして第三が父親です。羊飼いは「わたしは、良い牧者です。」（ヨハネ 10:11）と言われたイエス・キリストを指します。我が家のリビングルームには、子羊を抱いた、羊飼いの絵が飾ってありますが、キリストは、迷い出た羊を探し出し、抱きかかえて、ご自分の羊の群れに連れ戻してくださるのです。女の方は、聖霊を指します。女の方が銀貨を捜すときに「あかり」を見つけましたが、この「あかり」は、私たちの心を照らす、みことばの光のことかもしれません。聖霊は、神のことばによって私たちのところを探り、私たちを神のもとに連れ戻そうと、働いておられます。放蕩息子の父親は、父なる神のことを指します。私たちは、神がおひとりであり、同時に、父と御子と御霊であることを信じています。このことは、私たちの理性を超えたことで、完全に理解することはできませんが、聖書には、このように、あらゆるところで、三位一体の神が示されています。父、御子、御霊の神が、総がかりで、私たちを捜し求めていてくださるというのです。私たちはそれほどまでに神に愛されているのです。

この神の愛は、放蕩息子のたとえの中で、みごとにあらわされています。放蕩息子は、いまさら「息子でございます」と言って家に帰ることはできない、せめて雇い人のひとりにでもしてもらおうという気持ちで、帰ってきました。しかし、父親は、彼を息子として受け入れました。父親は死んだも同然となっていた息子が生き返って自分のもとに帰ってきた、いなくなっていた者が見つかったと喜び、その喜びを表わすために、「肥えた子牛を引いて来てほふりなさい。食べて祝おうではないか。」と言って祝宴を始めたのです。

このたとえで語られている「祝宴」は、神の喜びを表わしています。失われたものが見出される時、神から離れていたものが神に立ち返る時、神は、そのことを、他のどんなことよりも大きな喜びとして、喜んでくださるのです。「羊飼いと羊」「女の人と銀貨」のたとえ話も「喜び」で終わっていました。いなくなった一匹の羊を見つけた羊飼いは、羊を見つけると、友だちや近所の人たちを呼び集め、「いなくなった羊を見つけましたから、いっしょに喜んでください」と言っています（ルカ 15:5-6）。女の人も、なくなっていた一枚の銀貨を見つけたら、友だちや近所の女たちを呼び集めて、「なくした銀貨を見つけましたから、いっしょに喜んでください」と言っています。羊飼いは「ほら、これが見つけた羊だよ」と、見つけた羊を抱きかかえて、みんなに見せ、女の方は、「これが見つけた銀貨ですよ」といって、その銀貨を、みんなに見せたことでしょう。見つけた羊、取り戻した銀貨は、羊飼いにあって、また、女の人にとって、他の羊よりも、他の銀貨よりも大切なものとなったのです。そのように、神は、神のもとに立ち返る者たちを喜んでくださるのです。かつての放蕩息子は、父親の悲しみでしたが、家に帰ってきた息子は、父親の大きな喜びとなりました。父親が家中のしもべたちを集めて、息子が帰ってきたことを祝ったように、神は、神のもとに帰ってくる人々を喜び、その喜びを、世界のすべての人と分かちあいたいと願っているのです。

### 三、兄の怒り

ところが、この喜びを一緒に喜ぶことのできない者がいました。それが、放蕩息子の兄です。兄が、野良仕事から帰ってくると、家から賑やかな音楽が聞こえてきました。お祭りの日でもないのに、みんなが食べたり、飲んだり、歌ったり、踊ったりしており、しかも、それは、弟が帰ってきたからだというの

です。兄は、それを聞いて怒り、家に入ろうとはしませんでした。父親がやってきて、兄をなだめようとするのですが、兄は「ご覧なさい。長年の間、私はおとうさんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しめと言って、子山羊一匹下さったことはありません。それなのに、遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして帰って来たこのあなたの息子のためには、肥えた子牛をほふらせなされたのですか。」と父親に強く抗議しました。兄は、弟のことを「このあなたの息子」と呼んで、「あいつは、俺の兄弟なんかじゃない」と、冷たく突き放しています。放蕩息子は、悔い改めた罪人のことでしたが、では、この兄は誰のことをさしているのでしょうか。

それは、この章のはじめを見ると分かります。1節と2節にこう書いてあります。「さて、取税人、罪人たちがみな、イエスの話を聞こうとして、みもとに近寄って来た。すると、パリサイ人、律法学者たちは、つぶやいてこう言った。『この人は、罪人たちを受け入れて、食事までいっしょにする。』」3節には「そこでイエスは、彼らにこのようなたとえを話された」とあります。イエスが話したたとえ話は、パリサイ人、律法学者たちの非難に答えるためのものであり、ここに登場する「放蕩息子の兄」は、そのパリサイ人、律法学者のことであることが分かります。放蕩息子の兄が、「ご覧なさい。長年の間、私はおとうさんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません」と言って自分の正しさを主張したように、彼らは、「われわれだけが、神の戒めを正しく守っている」と言って、いつも自分たちを正しいとしていました。放蕩息子の兄が、弟を「この息子」と呼んだたように、「パリサイ人」「律法学者」たちは、宗教の規則を守ることでできない人々を「罪人」と呼んでさげすんでいました。放蕩息子の兄が、「その私には、友だちと楽しめと言って、子山羊一匹下さったことはありません」と言っ

て、父親を厳格なだけの人と見たように、パリサイ人、律法学者たちも、神を私たちに義務を押し付けるだけのお方と考えていました。しかし、神はそのようなお方ではありません。父親が兄に、「おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ」（31節）と言ったように、父親は生きているうちに財産をわけてやったのですから、兄は、弟が持っていた財産の残りすべてを自分のものにしてはいたのに、父親の寛大な心が分からなかったのです。そのようにパリサイ人、律法学者も、神の愛やあわれみ、恵みを理解していませんでした。

たとえ話の中で父親は、兄に、「だがおまえの弟は、死んでいたのが生き返って来たのだ。いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか」（32節）といさめています。これはそのまま、イエスがパリサイ人や律法学者に言いたかった言葉でした。パリサイ人、律法学者は、「この人は、罪人たちを受け入れて、食事までいっしょにする」と、イエスを非難しましたが、神は、罪人が悔い改めるのを待っておられ、それを何よりも喜ばれるお方です。イエスが彼らを悔い改めに導いているのを、誰が非難できるのでしょうか。失われた者が回復し、罪人が救われていく喜びを表わすための祝宴を、誰が差し止めることができるでしょう。

パリサイ人や律法学者たちは、過去のユダヤの世界の人々でしたが、今日も、パリサイ人や律法学者のような人は多くいるかもしれません。救われて喜びの中にある人を、冷たい目で見ている人がいるのです。自分の中に救いの喜びがないので、他の人の喜びがわからないから、一緒に喜べないのです。「私は正しい。私は、あんな人のようではない」と、自分の正しさを主張し、他の人を見下しているうちは、イエス・キリストの救いを理解することはできません。「信仰は弱い人が持つもの、私は、あの人のようには弱くはないから大丈夫」と思っているうちは、天にこだまする救いの喜びがわからないのです。イエスは、

「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです」（マルコ 2:17）と言われました。この言葉のとおり、自分の弱さを、罪を認めるところから救いがはじまるのです。他の誰でもなく、この「私」に救いが必要なことを知みましょう。そして、イエスの救いにあずかって、大きな喜びの中に入ろうではありませんか。すでに、イエス・キリストを信じて救われている者は、その喜びをもっと深く味わい、楽しもうではありませんか。

ルカ 15 章には失われたものが三つあると言いましたが、もしかしたら、それは四つだったかもしれません。「羊」と「銀貨」と「放蕩息子」と、そして「放蕩息子の兄」です。父親が兄にも、やさしい態度で接したように、イエスは、パリサイ人、律法学者たちにも、「あなたがたもまた失われている人たちで、神が帰ってくるのを待っておられる」とのメッセージを伝えたかったように思います。あなたが、もし、「自分は『放蕩息子の兄』だ。」と思うことがあっても、そう気付いたあなたを、神は待っておられます。兄も、弟も、へだてなく愛しておられる父なる神のもとに帰り、共に神の喜びの祝宴に加わろうではありませんか。

### （祈り）

父なる神さま、あなたは、私たちを愛し、イエス・キリストによって神に立ち返る者たちを喜んでいてくださいます。そして、私たちに、その喜びを共にしてほしいと願っておられます。私たちに、あなたの喜びを理解する心を与えてください。教会があなたに赦された者たちが、互いに赦しあい、受け入れあい、罪人の救いを喜びあうところとなりますように。主イエス・キリストのお名前です。